万博私見

～EXPO'70パビリオン訪問を機に～

ふちんかん

５５年前の思い出と再会

大阪万博開催当時、私は５歳（になる年）だった。親に連れられて訪問したわけだが、まったく全体像は見えていないし主体的な動きではないので、どこを訪ねたという明確な記憶もほとんど無い。

わずかに覚えているのは、太陽の塔の内部をエスカレーターで昇っていったこと（当時の私にはエスカレーターも珍しかった）、その途中で掌の形をしたカラフルな椅子があって座ってみたかった（座れなかった）ことである。

もうひとつ、『迷子ワッペン』なるホログラムの付いたきれいな名札を着けて見学したのだが、後日もそれを着けて家の周りを徘徊していたらしい。自分としては『迷子ワッペン』を着けていれば迷子にならない、と信じ込んでいたようで、家から５００ m ほど離れた豊中駅あたりまで探検していたらしい（後日両親がとても驚いていたことを覚えている）。

今回の取材で、掌の形をした椅子に再会し、座ることができたことは素直に嬉しかった（しかし思っていたのとは違い座り心地は悪かった）。また迷子ワッペンの展示を見て、幼児の自分に思いが翔んだことは、奇妙で楽しい感覚であった。

あと、エキスポランドは万博当時からあったというのは、私としては驚きであった。遊園地は万博の跡地利用的な形でできたと思い込んでいた。というのも当時に行った記憶が無い。さすがに幼児の私でも遊園地に行った記憶は残っているはずだから、うちの親はそういう選択をしなかったということだろう。堅物である。
そしてそれは私も同じで、自分の子どもたちをあまり遊園地には連れて行かなかっ

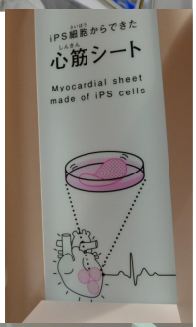
た。遊園地の刹那的な悦びより、博物館・資料館、自然体験のほうが価値があると思っていたからである。私も堅物である。

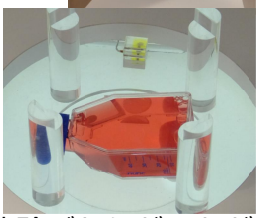
関西万博を改めて

さて大阪万博から５５年、今年は関西万博である。これは行かねばならないと思っていたので、夏休み期間のフリーパスを買っていた。

最初に言ってしまうが、関西万博には「がっかり」であった。

パビリオンの多くは、展示中心の見せるだけのものが多い。大型のスクリーンを用意すれば何とかなるとでも考えているのだろうか。この程度の刺激ではまったく魅せられない。こちらは見世物としてのインタラクティブ性、その場にいないと体験できない希少性を期待しているわけだ。





３回の訪問で良かったと思えたのは、ｉＰＳ細胞の実用演示を見れたこと、若者の発明のポスターセッションを廻れたこと、花火が思ったより迫力があったことくらい。逆に言うとそれ以外には残念なことに心が動かされなかった。わざわざ暑い中、出かけて、歩き回って、並んで、その結果に得られるものが割に合わないと感じたのである。万博にさえ行けば何か新しい刺激を与えてくれるに違いないという、私の受け身な参加の仕方に問題があるのだろう。

５５年前の万博は、実際に見に行かないと得られない希少な体験ばかりだっただろう。いっぽう今は、最先端の芸術・技術・多様な文化など、自宅で居ながらにして得られる時代だ。見せる側も、見る側も同じスキームで考えていてはいけない。

また７月から８月にかけて徐々に混雑が過ぎるのにも辟易とした。事前予約や当日予約がまるで取れない。その結果、会場を彷徨して、涼みがてらに入れる所に入るというスタンスとなる。そりゃあ、ろくな体験はできないわな。

関西万博に関しては『生涯で二度、近所の万博に行った』という自慢のために、無駄な時間と費用と体力を使ってしまったというのが正直なところである。
ネガティブですまんが実感である。　　（了）